

一

問一

ア 変哲 イ 代償 ウ 粗野 エ 報酬 オ 迷妄

問二

労働を通じて自然のもたらした成果を享受する農民たちの休息が体現する生の充実は、勤労働員時の麦刈り中に体感された自己充実の感覚と重なっているということ。

（解答欄 3 行）

問三

駐車場で車を入替える男の運転技量は並外れたものに違いないが、その仕事は自然に真摯に働きかけることで生が肯定されるという労働の本質を欠いており、報酬を得るだけの自己完結した空疎な遊戯としか思えないから。

（解答欄 4 行）

問四

現実のあるがままの生を全て肯定しつつ正しく表現することのみが芸術だとすれば、少年期から西洋の観念的世界に憧れ、抽象的言語による自律的な世界の価値を信じていた自分の生の存立に関わる衝撃であったから。

（解答欄 4 行）

問五

抽象的観念に閉じこもることなく、存在そのものの形象を把握する能力によつて、生命力に満ちた自然やその中における民衆の生の実相を固有の思想において統一し、自然も個人も普遍性を備えたものとして画中に再創造するが、それが同時に画家自身の生を充実させるというもの。

（解答欄 5 行）

問一

行きは留守宅に思いを残しつつも旅先への期待に胸を躍らせ、帰りは遊び心にけりをつけれないまま家路を急ぐといったように、旅に伴う情緒に心が揺れ動くということ。

（解答欄 3 行）

問二

感傷を抱え込んで旅から帰ってきた者にとっては、旅に出る前と同じ住みなれた家なのに、その部屋のあれこれが居心地悪いものに感じられ、日常生活に再びもどることをどこか遮断されているように思えるということ。

（解答欄 4 行）

問三

旅の経験がないのだから旅から帰ったときの思いなどわかりはしないと、自分の小言に逆らうように言っていた娘が、旅後のわが家に居心地悪さを感じ困惑している様子に、娘には良い経験になり、自分の意も通じたと思っただから。

（解答欄 4 行）

問四

旅帰りの者を迎える家人の振る舞いを父から示唆されたこともあり、普段味わえない旅宿のもてなしの見事さに気をとられていたのが、家には家の手際良いもてなし方があるかわかり、宿と家を比べる必要はないのだと悟ったから。

（解答欄 4 行）

問五

旅から帰った父を迎える際、父の意に沿うようにできたし、それは父にも通じただろうと思っていたのに、後に、家を守る者としては当然のことをしただけなのだからそれを吹聴することはないとわれ、その言葉を、自分のいたらなさを教えてくれるものと受け止めている。

（解答欄 5 行）

三

問一

句宮は大切にお思いいになつてゐる妻を持っていらつしやるから来ないのだろうと右大臣は不快だけれど、  
（解答欄 2 行）

問二

(2)

なんとかして表情に出すまいと思ひ直してこらえては、さりげなく心を静めなさることであるから、  
（解答欄 2 行）

(3)

たつた今すぐに戻つて参りましょう。一人で月をご覧になつてはいけません。心が落ち着かないのでとてもつらい。  
（解答欄 3 行）

問三

A は、右大臣の娘との婚儀のために、いじらしい中の君を見捨てていくのは気の毒だという気持ち。B は、婚儀の当日に婿が現れず、面目が立たなくてつらい思いをする右大臣とその娘に対して気の毒だという気持ち。

（解答欄 4 行）

問四

句宮の婚儀について、恨んだり嫉妬したりする気持ちは持たないけれど、それでも涙があふれてしかたないほど悲しいので、思うにまかせず情けないものは人の心であつたと、悲しみをこらえきれない自分の心をもてあましている。

（解答欄 5 行）